

2020年度 北星学園附属高等学校に関する第三者評価

はじめに

本校は、評価（第三者評価）は、私学マネジメント協会の会員校として、系列のコアネット教育総合研究所研究所 副所長 川畑浩之氏を評価委員に委嘱している。入学時のアンケート調査と、年間数回の管理職（学校長）との面談でヒアリングとアドバイスを委託した。以下、氏のレポートを抜粋して報告とする。

1. 2020年度の特徴

2017年度より「ICT教育推進のための委員会」を立ち上げ、本格的に2019年度に全生徒へタブレットPC（Microsoft製）を全生徒へリース配布し各教室に大型モニターを設置、通信環境インフラも含めて、ICT環境整備を行ってきた。その成果もあり、GIGAスクール構想には道内の私立学校でも遅れを取らない設備を整えている。予期せぬコロナ禍において、臨時休校が続いた中でも活用をすることができた。但し、新1年生については、始業した次の日から休校となり配布する機会を逸してしまったので、各自の家庭でのスマートフォンやPC利用によって補うということになった。すべての授業の配信を構築するまでのノウハウや設備はまだないが、若手教員を中心に授業を配信し、全クラスで朝と午後のホームルームを行うなどをして、課題のチェック、生活リズムが崩れないような配慮を行うことができたことが評価できる。

入学生徒数を大幅に上回ったことは、現在の入試制度下での定員順守の難しさがあるが、受験生から魅力ある学校として評価してもらっていると捉えることができるだろう。校長のリーダーシップのもと、全教職員で戦略的に独自性を構築し発信してきたことの成果でもある。

2. 各種アンケートの結果

数年前より入学者を対象とした「アンケート」を実施している。「本校に期待する点は何か」という項目で、一方的な知識の習得や学力の向上ではなく、最も期待されている点は、人との出会いやつながりによって、内面を成長させる教育である。キリスト教精神に基づいて、宗教教育や宗教的な価値観に基づく教育活動を根幹として活動を行っていることが、求心力となっていると分析する。

しかし、コロナ禍の2020年度においては、こうした機会が中止や延期となってしまった。そんな中でも、12月のクリスマス行事での花火の打ち上げや、モニターを使った全校集会、生徒会行事など工夫をして行った。収束の見通しが立たない状況において、次年度は校長方針として「With コロナ」を前提にして、各種行事や新しい取り組みを企画している。その取り組みが効果的に働くように挑戦されることを期待したい。

また年齢の若い教員、活用に意欲的な教員の採用が進んでいる。ICT活用に関しては、全体に負荷がかからないスピードで、若手教員を中心に取組み改革されることを期待したい。

3. 学習指導、進路指導について

男女共に英語や基礎学力の指導など、きめ細かな指導を期待していると言えよう。英語の少人数展開授業の実施などを通して、英語検定など外部試験の合格者が上昇している。系列校の北星学園大学の文学部英文学科へ10名が進学したことは、大きな前進である。

特進コースのみならず進学コースも含めて、国公立大学へ合格者を生み出したこともきめ細やかな学習指導が成果を生み出している。幅広い学力層に対応できるように、中間層が目標とする進学先を実現できるように工夫をされることを期待したい。生徒が求める教育に対して、推進できる環境づくり、教職員の意識の涵養は必要となるだろう。

4. 期待される教育を創造し実践するための取り組み

キャリア教育の一環として「探究」の学習活動を推進しており、魅力のひとつである。しかし 2 年次に行う総合学習の一つである海外コースも含めた 5 つのコースを選択して、事前学習から事後学習まで行う「総合研修旅行」が、コロナ禍の中で国内コースに変更、1 月に延期、最終的には中止となるという事態になったことは残念である。今後、海外の学校との遠隔交流など ICT を活用して授業の取り組みなどが行えると良いだろう。それが可能な環境は整備されている。新しい学力観に基づく教育を推進している途上にある。外部への研修の参加には、感染予防の観点から制限があるが、オンライン講習などを活用し「新しい学力観」に基づく「新しい授業」を実践することを目的として、教職員のスキルアップを行うことを期待したい。一部の教員は、オンライン講習を積極的に活用して研鑽をしている点が評価できる取り組みである。

職場での情報共有や働き方改革の一環として、ICT 利活用により、協働や業務の効率化を図ることをねらいとした仕組みづくりを模索してきた。校務支援システムを導入し、2020 年度は試験的な移行期間ではあったが、この点は今後、浸透すれば大切な改善活動と言えよう。

5. 「校長による学校評価」を受けてのさらなる提言

教育活動の充実、校内の分掌システムの整理、教員の働き方改革など校長が課題として意識としている点が多いが、伝統を否定せずに、大切にしてきたものを継承しつつ、保守的なシステムの改変を進めようとしている努力は評価できる。管理職（教頭）が交代し、新しいアイデアでさらなる前進を期待したスタートであった。結果的に、臨時休校や新型コロナウイルス感染対策の対応で追われた 1 年であったが、管理職が迅速に対応して取り組めた点は評価できる。

クラブ活動を中心にした学校作りから、クラブ活動も含めて、教科指導、ホームルーム 指導、学校行事、総合的な学習、キリスト教活動などを通して教育を構築していこうという一貫した姿勢が、全体に浸透することができるならば、もっと大きな前進になることを 期待する。組織的な改善活動ができることを期待したい。

（コアネット教育総合研究所 川畑浩之）